

日韓文化交流基金講演会

「韓(から)くにを旅して43年—その軌跡」

～2012年12月14日(金)日韓文化交流基金会議室にて～

写真家 藤本巧

私を韓国に向かわせたもの

私が写真の道を志したのはまだ10代の頃のことです。ヌーベルバーグに傾倒し、ミケランジェロ・アントニオーニの映画に映し出された、数カットの日雇い労働者の写真を見た時、あんな写真が撮りたい、そう思いました。カメラを購入した私は西成に日雇い労働者の写真を撮りに行ったりしていましたが、どうもじっくりいかない、手ごたえがありませんでした。その頃、雑誌『工藝』で一枚の写真を見つけました。朝鮮の牛市の写真でした。この雑誌は柳(やなぎ)宗悦(むねよし)が民藝の啓蒙を目的として発刊したのですが、その69号に朝鮮の紀行文が寄せられていたのです。

日本民藝館が設立されたのが1936年ですが、この紀行文はその調査のために旅した時のものだったと思われます。当時の朝鮮の工芸や工人たちの写真の最後に、牛市の写真がありました。それを見た時、こんな写真が撮れたらと思ったのです。この紀行文は柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司が3人で旅した朝鮮の記録です。当時私の家には柳宗悦の写真が飾られていました。民藝運動に賛同していた父が飾ったものですが、来客はこの写真を見て、私の祖父と勘違いしたりしたものです。

当時は今のように簡単に韓国旅行のできる時代ではありませんでしたが、たまたま河井寛次郎さんのインタビューテープを聞く機会がありまして、生の声を聴いてしまうと、やはり行ってみたいという思いがさらに募ってきてしまいました。

柳宗悦の旅を辿る

こうして私は1970年に初めて渡韓することになりました。同行した父はすでに2度ほど渡韓経験がありました。テープに録音された道程を辿るこの旅が、私の42年間の韓国とのかかわりの始まりでした。70年という大阪万博の年。日本は高度成長まっしぐらの時期です。柳宗悦が韓国で同じ道を歩いたのは、すでに30年以上前のことでした。もちろん宗悦



「村道(高霊)」1970

が歩いた当時の風景は撮れませんが、工芸品の背景となる風景が撮れたなら、という思いで韓国に向かいました。この頃はまだ韓国入国に際してビザも必要でし、出入国時には税関でカメラやフィルムのチェックが厳しくて緊張しました。撮った写真が税関で引っかかるのが一番怖かった時代です。

行程の第一歩は浅川巧の墓参りです。私の父は島根県の宮大工13代目で、木工や工芸にも関心を持っていましたが、10代の頃に柳宗悦の著作『私の念願』に書かれていた「浅川巧のこと」を読んで、将来、息子を儲けたら巧と名付けようと決めていたというのです。その縁で、まずは浅川巧の墓参りに向かったわけです。行ってみますと、きれいに掃除され、花が供えられています。聞いてみると、毎日訪れる人がいるというのです。

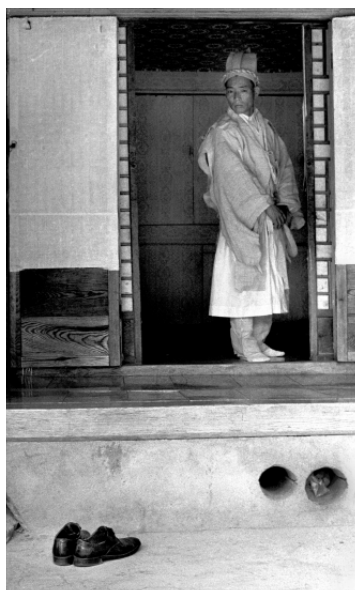
墓参りを済ませた私は列車で栄州、金泉を巡りました。父は同行せず、仁寺洞(ソウル)で工芸品を見て回っていました。私は道案内の青年と一緒に安東、栄州を巡り金泉で父と合流して、海印寺、高霊、南原を経由して通度寺まで各地を撮影して回りました。宗悦らが歩いた工芸の道を自分の足で巡り、韓国の工芸の背景を撮影することができたのです。この旅で私の目的は果たせたと思いました。

生涯の師、昔度輪(ソクドリョン)との出会い

ところが私はこの旅の最後の日に昔度輪先生(韓国美術評論家)に偶然お会いしたのです。先生の韓国の美についての話を聞いて、韓国の原風景をもっと撮りたいという思いに駆られました。帰国後、私は先生に弟子入りを申し出ました。こうして1972年から昔先生とともに古寺巡礼の旅に出たのです。先生は寺での修行の経験もありましたので、普通なら一般人が入れないような場所にも行けました。修行僧の剃髪の写真、座禅をしているところなども、先生と一緒に撮りました。数日でしたが僧房に泊まり修行僧と生活を共にしました。2010年にソウルの国立民俗博物館のスタッフと通度寺を訪れた時、僧侶の修行しているところを再度撮影することを申し出たのですが、たとえ高貴な人であっても、修行の場などに立ち入ることはできない、といわれました。

釜山近くの国清寺という寺を訪れた時、たまたま葬式に遭遇しました。古式に則った未晒しの麻の喪服を着た老人が大雄殿から出てきたとき、その美しさに驚き無我夢中でシャッターを切りました。しかし隣に佇む息子の姿を見て、ファインダーを覗くことを止めました。彼はワイシャツの上に喪服を着て、革靴を履いていたのです。この頃韓国ではセマウル運動(新しい村作り)が始まり、原風景が急速になくなり始めていました。藁ぶき屋根がスレート屋根にとって代わり、近代化が地方にも押し寄せていました。シャッターを切ろうとしない私を見て、昔先生はこれも韓国の文化であると叱られました。

「君は美しさの本質を分かっていない」それは表面的な美しさでしか韓国を見ていない、もっと広い視野で見るべきだとたしなめられました。そのころ民藝運動の賛同者のなかには、その国の民俗の背景を通り過ぎて物の美しさだけを見て良し悪しを決める傾向がありました。私もそのような観点から韓国にレンズを向けていることに気がついたのです。この時が転機となり、私は新しい視線で韓国を撮影するようになりました。



1974年に昔先生との旅の思い出を一冊の本『韓びと』（私家版で400冊）にまとめました。昔先生には「韓国の根源の美しさを表現できたな」と喜ばれましたが、日本の大型書店に十冊委託してもらいましたが一冊しか売れませんでした。しかし、私にとって昔先生の言葉が大きな支えとなり今日に至っております。

「喪主と靴（釜山）」1972

念願の招待展へ

1975年頃から私は一人で旅をするようになりました。まだ外出禁止令（0時から4時まで）があった時代です。この頃撮ったジャガルチ市場の写真を『韓くにの風と人』、お寺を『韓くに・古き寺』、農村を『韓くに幾山河』として上梓しました。この三部作は写真だけを直視してもらおうと、まったく説明文を入れませんでした。その後、写真だけでなく記録として文章も書くようになりました。2006年に出版した『韓くに、風と人の記録』は、韓国を通してお世話になった方々の文章とともに一冊に構成した写真集です。これでやっと私と韓国の旅が終わったような気がしました。

しかし、振り返りますと、私は韓国の地でまだ展覧会をしたことがなかったのです。できれば自主ではなく韓国の人たちの手で催されることを願いました。その時が来てはじめて私の写真が韓国の人たちに受け入れられたと思えるからです。

2010年、仁寺洞にあるギャラリーから招待展として写真展を開催することができました。オープニングには韓国の著名な方々が来廊されました。ある人から「貴方の写真を韓国に寄贈してくれないか？」と言われました。展示している40数点を寄贈してもいいと軽い気持ちで了承したところ、それから数ヶ月後、その人から寄贈先がソウルの国立民俗博物館

に決まったという知らせがありました。ところが寄贈の申し出は、これまで撮った韓国のすべての写真ネガをと言われたのです。さすがにそれには驚き断りかけましたが、その時浅川巧の「朝鮮のものは朝鮮の地に」ということばを思い出したのです。また博物館のスタッフがまとめてくれた私の写真リストの出来栄えに感動して、韓国国立民俗博物館で永久保存されることが、これまで撮り続けてきた「写真ネガ」の居場所だと考えました。

寄贈したのち、私は新しい目標ができました。それは韓国民俗の50年誌です。今43年ですからあと7年。50年経てばこの国の人たちが気がつかなかった部分が浮き上がるのではないか、そのためには体力も経済力も必要ですが、何よりも行動だと思います。被写体に近づいて写真を撮ることは非常に勇気のいることで、ジャガルチ市場で働くアジュンマの姿を1m手前でシャッターを切るにはお酒の力を借りることもありました。条件が厳しくても映像を残したいと思う気力が絶えないかぎり、写真が撮れると思っております。韓国の人たちが気がつかない「ありふれた風景」。どこへ行っても自分なりに面白いところを見つけながら、これからも取材することが、私のライフワークです。



「露天商の喧嘩（ジャガルチ市場）」1975



ふじもと たくみ
藤本 巧

PROFILE

1949年、島根県に生まれる。写真家。二十歳から韓国の風土と人びとを撮り続ける。著書に『韓くにの風と人』ほか三部作（フィルムアート社）、『韓くに風の旅』（筑摩書房）、鶴見俊輔共著『風韻 日本人として』（フィルムアート社）など。1987年度咲くやこの花賞受賞。韓国・2011年度文化体育観光部長官賞受賞。2012年には韓国国立民俗博物館にて「韓国を愛する巧写真展 7080過ぎ去った私たちの日常」展を開催。